

## 中井正一研究とメディア社会学の視点

門 部 昌 志

### 要 約

中井正一は、マルクス主義的コミュニケーション論の視座から研究されてきた。しかしながら、近年の研究では、中井正一はメディア論の文脈から議論される傾向にある。本稿の目的は、美学者、中井正一をメディア社会学の理論家として再考するために、マルクス主義のコミュニケーション論による中井研究が提起してきた諸問題を考察することにある。ただし、本稿では、コミュニケーション論とメディア論の二者択一を前提としてはいない。なぜなら、マルクス主義のコミュニケーション論による中井研究にはメディア論の視点が含まれており、しかも、中井自身の著作においても、コミュニケーション論とメディア論の両者を見出さうからである。

本稿では、中井研究においてマルクス主義のコミュニケーション論が提起した問題を考察する。この際、二項対立ではなく、行為／構造、コミュニケーション／メディアの交叉を注視する。マルクス主義の議論を背景とし、交叉に留意することによって、中井正一のメディア社会学的読解を探求することができる。

### はじめに

周知のように、中井正一は三木清や戸坂潤の同時代を生きた美学者である。『世界文化』や『土曜日』を通じて反ファシズム文化運動の実践に参加した彼は、論文「委員会の論理」(1936)で集团的主体性を理論的に探求した。彼にとって1930年代は危機の時代である。中井によれば、文化の商品化や専門化

の過程、さらには専門化の徹底が逆説的に生み出す大衆化<sup>(1)</sup>が1930年代の「思想的危機」である[「思想的危機における芸術ならびにその動向」(1932)]。人格的個人の時代は終わり、上からの組織化が進行してゆく<sup>(2)</sup>。集団的主体性の模索は、この危機的状況を内在的に「乗り越える」試みにほかならない<sup>(3)</sup>。ただし、中井の追求する「実践的主体性」は、連続的の同一性をもつ実体ではなく、分裂をはらみつつ進展する過程である<sup>(4)</sup>。

個人主義文化から集団主義文化への転換期において、伝統美学も危機に直面していた。映画は集団的に製作されるものであり、伝統的な個人主義美学によって把握し得ない要素を含んでいた。中井は、正統的なカント研究から出発したにもかかわらず、映画を否定してはいない。彼はむしろこの集団的芸術を梃子として従来の美学を批判し、新たな美学と映画理論を創出した[「現代美学の危機と映画理論」(1950)]。映画を梃子として既存の美学を批判する中井の思考は、高級文化と大衆文化の位階序列に縛られることがなく<sup>(5)</sup>、集団的主体性の模索と結びついている点で興味深いものである。

伝統美学への批判、さらには政治的実践にもかかわらず、中井正一は美学者として理解されるのが一般的である。しかし、彼の著作には、コミュニケーション論的に解釈しうる契機が潜在している。たとえば「委員会の論理」における「委員会」は、提案、計画、報告、批判の四契機からなる実践の論理を含んでおり、集団的な「コミュニケーションの形」<sup>(6)</sup>と見なされている。さらに、「委員会の論理」の着想を応用した彼の美学「マス・コミュニケーションの美学」と呼ばれることもある<sup>(7)</sup>。実際、1950年代後半以降、コミュニケーション論の文脈で中井が議論される。

1970年代以降になると、コミュニケーション論の表題を掲げた中井研究においてさえ、メディアという術語がしばしば用いられている。中井の著作には、コミュニケーション論のみならず、メディア論的に解釈しうる要素がある。とはいえ、メディア論の表題を掲げた中井研究は今日でも少ない<sup>(8)</sup>。私見では、従来の中井研究において、コミュニケーション論とメディア論の間に位階序列が成立していたように思われる。そこでは、たとえば、メディアと

いう術語が使用される場合でも、コミュニケーション論的視点に対しメディア論的視点は二次的なものとされる。この限りで、中井研究におけるメディア論的視点を再評価することが必要と思われる。

ただし、メディア論の視点から中井を論じる際の陥穽は、コミュニケーション論的中井研究の提示した問題を忘却することである。本稿が模索する方向は、メディア論を軽視したコミュニケーション論的中井研究、及びコミュニケーション論なきメディア論的中井研究のいずれとも異なる。以下では、中井正一のメディア論的解釈にむけて、コミュニケーション論的中井研究の提起した問題を考察する。本稿の前提は、コミュニケーション論とメディア論の二者択一ではないからである。主体間の伝達と受容であるコミュニケーションはメディアを介して可能になる。他方、メディアによる主体の認識の規定はコミュニケーションを前提とする。コミュニケーションとメディアは絡み合いの関係にある。

本稿の課題は、第一に、コミュニケーションとメディアの関連性を前提としながら、中井正一研究の提示した問題を考察すること、第二に、従来、相対的に軽視されてきたメディア論の視点を再評価することにある。しかし、より正確に述べるならば、本稿の視点は、メディア社会学というべきものである。メディア論者に特有の陥穽は、メディアを社会から切り離すことで、メディアの規定性を誇張すること、すなわち技術決定論に陥ることである。メディアによる知覚変容を探求するメディア論とは対照的に、知識社会学では、知識の社会的拘束が探求される。ここでは逆に、メディアによる知覚の規定という観点は、メディア論ほど十分に展開されてはいない。本稿で言うメディア社会学とは、技術決定論と社会決定論の両者を回避しつつ、メディアによる感覚や認識の規定性を探求する試みを意味している。メディアは知覚を規定するが、他方、メディアは特定の社会的コンテクストの中で発明され、普及し、利用されるという二重の認識が必要である。

本稿では、マルクス主義のコミュニケーション論による中井研究の歴史を振り返り、そこで提起された問題を考察する。中井研究という場合、著作の

解釈を一次的な目的とした狭義の中井研究と、解釈よりむしろ彼の視点の継承・発展に焦点を合わせた研究が考えられよう。本稿で言う中井研究は、両者を含む。マルクス主義のコミュニケーション論による中井研究の問題を考察することは二重の意味をもつ。マルクス主義的コミュニケーション論の問題を考察する作業によって、逆説的にも、中井正一におけるメディア社会学的側面を照らし出すことができる。マルクス主義のコミュニケーション論による中井研究にはすでにメディア社会学的視点が含まれているからである。

## 1. 鶴見俊輔の中井解釈

1957年、鶴見俊輔は論文「マルクス主義のコミュニケーション論」を発表している [鶴見, 1975]<sup>(9)</sup>。これは、戦後日本のマス・コミュニケーション研究において、マルクス主義的パラダイムの先駆けとなった論文である<sup>(10)</sup>。50年代後半に書かれたとはいえ、そこには既に経済決定論や反映論への批判がある。中井に対する言及は、ごく僅かなものであり、注でなされているにすぎない。しかし、鶴見による他の中井論と比較した際、この論文には彼による中井解釈の原型的枠組みが含まれていることは明らかである。さらに、戦後日本のコミュニケーション論において、マルクス主義的パラダイムを模索する先駆的論文で中井正一が先行者として言及されたことは重要である。以下では、この論文を軸として、鶴見による中井解釈を整理してゆく。論文の前半ではマルクスとエンゲルス、及びマルクス主義におけるコミュニケーション論が浮き彫りにされている。本稿の目的に関連するのは、唯物史観と組織論という二つの問題系である。

### (1) 唯物史観の問題—観念と物質の絡み合い—

前半部分では、コミュニケーション論の視点から唯物史観が論じられている。興味深いのは、第一に、唯物論と観念論、上部構造と下部構造、そしてマルクス主義とコミュニケーション論が二分法において把握されてはいないことである。第二に、二項の結びつきを前提とした上で、唯物論や下部構造

など、従来、高位を占めていた項の価値が戦略的に転倒されている点である。

鶴見によると、敗戦直後、コミュニケーション研究の必要性を主張したとき、それはマルクス主義哲学者から観念論として無視されたという〔同上、420頁〕。マルクス主義とコミュニケーション論は、唯物論と観念論として対立的に把握されていたようである。これに対し、鶴見は一方で「マルクス主義には……（略）…絶対観念論的な傾斜がひそんで」いることを指摘しつつ〔同上、428頁〕、他方で「マルクス主義のコミュニケーション論」を模索する。したがって、鶴見の場合、唯物論と観念論、そして、これに対応するマルクス主義とコミュニケーション論という対立は前提とされていない。むしろこれら諸対立のなかに交叉を見出し、それを顕在化させる発想がみられるように思われる。

この論文ではマルクスとエンゲルス、レーニン、毛沢東<sup>(11)</sup>などがコミュニケーション論の観点から言及される。鶴見によると、マルクス及びエンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』において、コミュニケーションは「交通（Verkehr）」の問題として提出された。鶴見の読解によると、精神（象徴作用）はまず、「精神的交通としての言語に制約され、その精神的交通がさらに物質的交通に制約され、それがさらに生産力の発展段階に制約される」〔同上、421頁〕<sup>(12)</sup>。要するに、精神作用を制約するのは、「言語的交通、社会生活的交通、物質的交通」という三種の交通である<sup>(13)</sup>。この条件下では、ある精神作用を批判するために、その精神作用を制約している交通形態を指摘し、批判する方法を取ることができる。鶴見はこの方法を「思想にたいするコミュニケーション論的批判」と呼び、『ドイツ・イデオロギー』のマルクス及びエンゲルスによる批判の方法に重ね合わせている〔同上、421頁〕。ただし、鶴見の立場は、単純な経済決定論ではない。彼は、上部構造に属する言語の「相対的自律性」に注目している<sup>(14)</sup>。この問題に関して重要なのは、毛沢東の『矛盾論』から鶴見が引用した箇所、彼がコミュニケーションと一般史の関係を投影している点である〔同上、435頁〕。毛沢東によれば、一般に経済的土台は主要な決定的役割としてあらわれるが、「生産関係、理論、上部構造など

の側面も、一定の条件のもとでは、転じて、主要な決定的なはたらきをするものとしてあらわれる」[毛, 1957, 68 頁]。物質的なものが精神的なものを決定するというもののみならず、経済的土台に対する上部構造の反作用を「みとめなければならない」。毛沢東にとって、上部構造の働きを認めることは唯物論にそむくことではなく、むしろ機械的唯物論を避けて「弁証法的唯物論を堅持すること」である[同上, 69 頁]。鶴見の場合、この視点はコミュニケーションと一般史の関係に適用される。したがって、彼の視点は、物質による観念の制約を認めつつも、一定の条件で上部構造の決定的な働きを認めるものである。コミュニケーションと一般史の関係は排他的対立ではなく相互的な規定関係から把握されている。50 年代と 90 年代のパラダイムの相違は大きい、観念と物質の対立を拒絶しながら両者の絡み合いを問うという点は<sup>(15)</sup>、鋭い視点と思われる。むろん、今日、毛沢東はクリステヴァによって再検討されており<sup>(16)</sup>、また、土台＝上部構造図式の現代版である構造の本質主義は、すでにラク라우によって批判されていることを忘却すべきではないとしても<sup>(17)</sup>。

## (2) コミュニケーション思想史

論文「マルクス主義のコミュニケーション論」で、鶴見は、物質的なものによる精神的なものの制約を前提としつつ、他方で上部構造にも規定性を認め、コミュニケーションと一般史を相互的な関係から把握していた。この立場によってこそ、マルクス主義におけるコミュニケーション論が重要課題と見なしうる。だが、論文「マルクス主義のコミュニケーション論」(1957)の段階では、これらは未だ一般論として提示されたままである。

「戦後からの評価」(1959)では、経済決定論への批判的姿勢は、中井論の文脈にあらわれる。そこでは、中井におけるコミュニケーション論的視点が、論理とその歴史の間の決定論的関係を避けるものとして評価される。「中井正一は、論理と歴史とを直接にむすびつけてごういんに歴史の発展段階にあわせて論理の発展段階を考えてゆく方法をとらずに、論理と歴史とのあいだに

コミュニケーションという中間項をいれて考えた」[鶴見, 1962, 286 頁]。同時期の論文「思想の発酵母胎」(1959)の中で、この視点は「コミュニケーション思想史」と呼ばれる。鶴見の中井解釈によると、論理法則は具体的な人間の通信様式から抽象されて発見される。したがって、人間の歴史における論理学の発達段階は人間の歴史におけるコミュニケーションの発達段階に対応する。論理学史とコミュニケーション史は互いに対応しており、この両者の媒介をするものが鶴見の言う「コミュニケーション思想史」である[鶴見, 1959, 33 頁]。この概要は以下のようなものである。第一に、古代におけるコミュニケーションの形は話しであり、ここから討論術としての弁証法論理学が生まれた。ソクラテス、プラトン、アリストテレスの論理学がその例である。第二に、中世では僧院での読み書きというコミュニケーションの形があり、ここから瞑想の習慣が生まれ、自己の作った拘束以外には屈従せずに考えることから唯名論の論理学が生まれた。アウグスティヌス、スコトゥス、オッカムの論理学がその例としてあげられている。第三に、近代では印刷の普及、および同一文書が多数の同時代人によって読まれ検討されるというコミュニケーションの形があり、ペイコンなど経験主義の論理学が生み出される。この段階では、他にも、カントや若きヘーゲル、キルケゴールの論理学があり、これらは行為によるコミュニケーションの世界から抽象されて生まれてきた。次に、生産の論理であるマルクスの論理学が、生産機構によるコミュニケーションの世界から抽象されて生み出される。さらに、生産機構の部分的活動として目的意識を失い、相対的に独立した活動となった専門技術のコミュニケーションの世界から抽象されて、カルナップの論理学など、機能の論理が生み出される。最後にあらわれるのが古代以来のあらゆる論理を再編成する「委員会の論理」である[鶴見, 1959, 33 頁, 鶴見, 1962, 286~287 頁]。

既に述べたように、鶴見の「思想にたいするコミュニケーション論的批判」とは、ある精神作用を批判するために、それを制約している交通形態を指摘し、批判する方法である[鶴見, 1957, 421 頁]。この前提は、物質的なもの



による精神的なものの制約を認めると同時に、特定の条件下における上部構造の決定的働きを認める立場の結合という複眼的思考である。これを背景として、論理学史とコミュニケーション史を媒介する「コミュニケーション思想史」の視点が、鶴見の中井解釈を介して、生み出されたのである。メディアという術語は用いられていないものの、メディア社会学及びメディア思想史などの視点の萌芽がここには含まれているように思われる。

### (3) 集団的コミュニケーションと弁証法の関連

論文「マルクス主義のコミュニケーション論」では、唯物史観のコミュニケーション論が浮き彫りにされていた。この試みがコミュニケーション思想史に展開する様は先に見たとおりである。論文「マルクス主義のコミュニケーション論」の中で、もう一つの重要な問題系は組織論のコミュニケーション論的解釈である。

マルクス及びエンゲルスのコミュニケーション論を剔出した後、鶴見はマルクス以後のコミュニケーション論の系譜を描き出す。それによればレーニンの特徴は、前衛党内のコミュニケーション、及び前衛党と大衆のコミュニケーションのあるべき形を論じた点にある。レーニンの『一步前進、二歩後退』（1904）は、ロシア社会民主党第二回大会の議事録の分析から「党内の非革命的分子の傾向を批判したもの」である。第二インターナショナルの改良主義的傾向から分離しようとするレーニンにとって、以心伝心的結合にもとづく「サークル的な思考法」は「日和見主義の温床」であり、これに対して委員会における討論にもとづく「公党としての思考方法」がすすめられる〔鶴見、1957、431頁〕。

鶴見によれば、レーニンの寄与は、第一に、明文化された原則に基づき、大会によって決定された議論を積み重ねる委員会のコミュニケーションを、弁証法的思考を鍛える場として認識した点にある。第二に、個人的な思索の次元に関連するヘーゲルの弁証法論理学に対し、レーニンはそれを集団的コミュニケーションの次元で定式化した点で重要である〔同上、432頁〕。では、



中井とレーニンの関係はどうであろうか。「思想の発酵母胎」で、鶴見は、中井の「委員会の論理」はレーニンの『一步前進、二歩後退』の影響下にありながら、昭和10年代における政府の弾圧に対してレーニンの名を伏せて提出されたものだと述べる<sup>(18)</sup>。さらに、「委員会の論理」は、ヘーゲル論理学の20世紀的復活であると同時に、「レーニン論理学の発展」として提出されたと解釈される。確かに、中井の著作においても、個人的思索と結びついた弁証法を集团的コミュニケーションとしての委員会に関連づけるというレーニンの方向性が見いだせる。しかし、古代、中世、近代の「いわれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」を定式化し、これらを再編成する「委員会の論理」を提示した点の中井の独自性である。興味深いのは、各時代のコミュニケーション・メディアと論理を対応づける発想と、これらを再編成する集团的コミュニケーションとしての委員会という発想が共存していることである。

#### (4) サークルと「委員会の論理」

既に見たように、鶴見俊輔は、集团的コミュニケーションと弁証法の関連づけという視点からレーニンを論じ[鶴見, 1957, 432 頁]、「レーニンの論理学の発展」として「委員会の論理」を位置づけた[鶴見, 1959, 33 頁]。この「委員会の論理」解釈は論文「思想の発酵母胎」で具体的問題に適用され、サークルを考察する際の一拠点となっている。サークルと「委員会の論理」の結びつきは意外であろうか。いや、そうではない。両者は共に集团的思考という点で共通しており、共同研究への言及もここから理解しうる。また、中井正一は、小新聞『土曜日』を介して人民戦線を展開する中で、「汎ての読者が執筆者となる」ような集团的思考を模索した。おそらく、鶴見のサークル論は中井の試みの更なる展開として理解できるかもしれない<sup>(19)</sup>。

鶴見によると、サークルの論理は「委員会の論理」における第一段階、古代弁証法に対応する。サークルから生み出される思想の形は、分析的な演繹の論理ではなく、実証科学の帰納の論理でもない。それは「古代的な弁証法

の復活」である。こうして、サークルにおける学問や芸術は各領域での「最低の限界単位」となる。サークルを評価するのに必要なのは、サークルで作り出される「限界学問・限界芸術」を重視すること、さらに「そこから学問あるいは芸術の全体を再構成するという野心」である[同上, 38 頁]。ただし、「古代的な弁証法の復活」としてのサークルの論理がそれ自体で肯定されているのではない。討論, 思索, 経験, 技術, 生産など, あらゆる論理を再編成した「委員会の論理」の視点を取り込むことでサークルを活性化することが目指されていたようである。

鶴見によると、戦後のサークルでは、固定した指導者の役割への批判として「指導者なしでやってゆくという集団方式」をとり、その結果、「のびなやみ」に直面している[同上, 31 頁]。戦後、日本政府が活動を停止したとき、サークルが全国をふうびした。しかし、日本政府が新しい「委員会の論理」の体系として出直した時、原始的なサークル方式は敗北と退却を経験した。ここで、サークル方式に新たな委員会の視点を導入することが必要となる。鶴見は、何かの事業をなしとげるには、サークルの論理では不十分であり、「委員会の論理」が不可欠であることを指摘する。

鶴見の提案は、戦後サークルに特有の「指導者ぬき」から「指導者づくり」に回帰するものではない[同上, 32 頁]。指導者、被指導者という区分に対して鶴見は集団的思考の「管理者」をつけ加えている。ここから「編集者の思想」の評価が生じる。編集者は「あいまいかつ無限定なアイデアをもって執筆者の間をゆききして、各執筆者の内部にそのアイデアをほうりこんで はこうさせ、より明確な論文、記録、創作をつくることを助ける」[同上, 30 頁]。ただし、指導者、被指導者、管理者、という区分は階層ではなく、「役割」の区分として想定されている。「同一人物の中で三つの役割が演じられることがもっとものぞましい」のである[同上, 31 頁]。

彼は、「『委員会の論理』の座となりうる二つの体系の型」を指摘している。第一に、綱領をもった公的団体にサークルが配属されるという形である。この場合、サークル方式の目標は、教条主義に陥りやすい公的機能団体に、状

況感覚と機動性をつけ加えることになる。第二に、「無政府主義的」なサークルの自由連合として公的団体が成立するという形である。鶴見は、これらの二者択一を拒絶する。サークルの問題は、「無政府主義か共産主義か、AかBか」というような仕方ではなく、対立的かつ相補的に新しい関係でとらえられるべき」である[同上、35頁]。ここでは、公的団体に配属されたサークルと自然発生的なサークルの自由連合の両者が「対立的かつ相補的に」捉えられており、運動方針の相互的批判とメンバーの活発な交流が勧められる。

## 2. マルクス主義のコミュニケーション論における中井研究の展開

### (1) マルクス主義のコミュニケーション論と中井正一

「マルクス主義のコミュニケーション論」(1957)や「思想の発酵母胎」(1959)、「戦後からの評価」(1959)を通して、鶴見俊輔がマルクス主義のコミュニケーション論を提示し、その視座から中井を解釈する様を振り返ってきた。ここで、以上の論点を整理する。論文「マルクス主義のコミュニケーション論」を原型として展開された鶴見の「委員会の論理」解釈の中で、ここでは二系列の問題を考察してきた。第一は、上部構造の働きを再評価する弁証法的唯物論による解釈、及びここから導かれたコミュニケーション思想史という視点である。第二は、集団的コミュニケーションと弁証法の関連づけという文脈からの解釈であり、これは批判的サークル論に展開される。私見では、前者はコミュニケーションの媒体によって認識が規定されるというメディア論的視点に対応し、後者は集団の次元におけるマルクス主義のコミュニケーション論に対応する。

では、マルクス主義のコミュニケーション論における中井解釈はいかなる意義を持つのであろうか。まず、中井正一研究の立場からは、マルクス主義のコミュニケーション論が中井解釈の一視点として意義を持つことは明らかである。次に、戦後のマルクス主義的コミュニケーション研究の立場からは、先駆者を明示した点で鶴見の中井解釈は意義を持つように思われる。実際、彼の中井解釈は当時のコミュニケーション研究に何らかのインパクトを与え

た。「マルクス主義のコミュニケーション論」を鶴見が発表した後、稲葉三千男は、論文「マルクス主義のマス・コミュニケーション論」(1960)で返答し(20)、その9年後、稲葉は「中井正一の“媒介”論」(1969)を発表する[稲葉, 1987]。また、1960年に発表された上山春平の書評でも、中井の先駆的意義として「コミュニケーション史の着想をふくんでいる点」が指摘されている[上山, 1960, 59頁]。50年代後半から60年代にかけて、中井はマルクス主義的コミュニケーション研究における古典の一つとして認知された。その一契機が鶴見俊輔の仕事である。

戦後のマルクス主義的コミュニケーション研究における鶴見の中井解釈の第二の意義は、「コミュニケーション思想史」という視点の創出である。先に述べたように、「コミュニケーション思想史」は論理学史とコミュニケーション史を媒介するものであり、その前提は両者が対応することにあった[鶴見, 1959, 33頁]。50年代後半、「委員会の論理」に言及する際に用いられた「コミュニケーション思想史」の術語は、70年代に継承されている。その代表的な例が1973年の『講座・コミュニケーション』、とりわけ鶴見俊輔が「編集」を担当した第1巻『コミュニケーション思想史』である。「はしがき」で表明された「コミュニケーション思想史」の含意は、第一に、古典的思想家の著作に含まれたコミュニケーション論に着目することにより、「世界の思想史を再構成すること」である。この視点は、論文「マルクス主義のコミュニケーション論」にも見られたものである。「プラトンやアリストテレスの体系の中に、古典的なコミュニケーション論がすでにある。哲学史は、コミュニケーション観の変遷の歴史として、とらえなおすことができる」[鶴見, 1957, 420頁]。第二の含意は、コミュニケーションの観点から古典を要約する場合、彼らの研究の前提となった「歴史的・思想的条件との関連を明らかにする」ことである。したがって、「コミュニケーション思想史」には、思想のコミュニケーション論的再解釈と思想の条件づけに対する二重の視点が含まれている。これは観念と物質の絡み合いを前提としたものであろう。

鶴見俊輔を介して中井がコミュニケーション論に残した痕跡はこの他にも

ある。第1巻では、「運動のつくりだすもの」を主題とした＜共同研究＞が、井上俊、竹内成明、松本勤、山本明によってなされている。コミュニケーション思想史の試みは、集団的思考の一形態である＜共同研究＞の実践と共にある。『コミュニケーション思想史』の最後は、針生一郎による「中井正一のコミュニケーション論」によって閉じられている点はコミュニケーション論における中井正一の重要性を告げている。

鶴見による中井読解がコミュニケーション研究に寄与したものは、第一に戦後マス・コミュニケーション研究におけるマルクス主義的視座の提示であり、第二に、その先駆者として中井を位置づけたこと、第三に、中井を論じるなかで、コミュニケーション思想史の視点を導き出したことである。今日、私たちは、これを異なる文脈から反復することが出来る。これは、メディアの批判的研究、およびメディア思想史<sup>(21)</sup>という観点を探求すると同時に、こうした文脈から中井を読み直すことである。鶴見俊輔によって剔出された中井への視点はその後も継承されている。以下では、認識論的視点、及び組織論的視点について検討し、最後に、両者の関連性について考察する。

## (2) 「メディア史の論理」

1972年、山田宗睦は『コミュニケーションの文明』を出版する。63年から71年の文章を収録したこの著作は中井正一研究の表題を掲げているわけではない。しかし、実質的内容は、中井の理論、及び鶴見の中井解釈を継承するものである。山田の議論からは、鶴見のそれと密接に関連する二つの点が見いだせる。第一は、土台—上部構造の図式に対する批判からコミュニケーション論を重視する視点である。かつて鶴見は、物質による観念の制約を認めつつも、一定の条件で上部構造の決定的な働きを認めていた。マルクス主義におけるコミュニケーション論の重要性はそこから生じる。山田においてもまた、「＜コミュニケーション＞を、＜生産＞と同等の基本カテゴリーとして、＜生産＞をもとに社会現象をとらえてきたこれまでの諸理論をこえたいという志向」が基盤にある〔山田、1972、315頁〕。山田によると、現代は「コ

コミュニケーションがその巨大な機能を自立させる時代である」。これに伴って、「現代では、<生産の軸>から社会構造を分析する見方にたいし、<コミュニケーションの軸>から社会を再構成する見方が成立しつつある」[同上、268頁]。これは、経済決定論とは一線を描き観念の次元を重視するマルクス主義のコミュニケーション論という点で鶴見の視点の延長線上にある。

山田の議論と鶴見のそれと関連する第二の点は、各文化段階の定式化である。既に見たように、「委員会の論理」における各文化段階の定式化は、鶴見において「コミュニケーション思想史」へと展開されていた。『コミュニケーションの文明』の中で、「委員会の論理」は「メディア史の論理」と呼びかえられている<sup>(22)</sup>。山田によると、コミュニケーションが物的交通から自立するには、例えば印刷術のような、精神的交通をのせる乗り物 (vehicle) を見つけることが必要である。山田におけるコミュニケーション・ヴィークルはコミュニケーション・メディアに対応する概念である。山田は、「委員会の論理」をメディアに適用し、乗り物としての新聞や雑誌と認識の密接な関係を指摘する。「新聞という乗り物が、量的に、政論を通じて「討論」の論理という乗り方をそだてていたとき、雑誌は、それと対応する「思考」の論理を質的にそだてていた」[同上、241頁]。しかし山田が、「委員会の論理」を「メディア史の論理」と呼びかえたのには理由があろう。山田によれば、中井はテレビを予測していたが、中井美学はテレビが日本に普及する以前のものであった。これに対して、「メディア史の論理」はテレビの普及後のものであり、テレビの形成する認識構造を説明する。山田によると、「テレビ映像(という生産労働の成果)をみることのなかに、あたらしい認識構造が形成される過程が進行している」のであり、[同上、213頁]、「テレビの認識構造は、認識対象対認識主観という古典的構造をうちこわした新しい認識構造」である[同上、220頁]。ここで崩壊したと述べられている「認識対象対認識主観という古典的構造」はマルクス主義の反映論に含まれていたものである。弁証法的唯物論の認識は、物質(対象)をどう意識(主観)に反映するかという古典的な<対象—主観の二極構造>に規定されていた[同上、203頁]。したがっ

て、ここには、鶴見俊輔と同様に、反映論への批判が読みとれる。

山田の議論は、マルクス主義でありながら、反映論批判と上部構造を重視する立場にある。それはメディアによる認識の規定性を歴史的に定式化する試みといってよい。興味深いのは、極めて異なった時代状況や理論的背景から生み出された批判的思考において、観念の領域をメディアに関連づけ歴史的に理論化する試みが、差異を孕んで反復されていることである。ここでマーク・ポスターの『情報様式論』が想起できる<sup>(23)</sup>。両者の同一性と差異性を詳しく検討することは本稿の課題をこえる。ただし「メディア史の論理」のなかで「媒介作用」が明確化されている点は、山田の慧眼である<sup>(24)</sup>。

山田によると、印刷メディアにおいても放送メディアにおいても、送り手と受け手の間には「媒介過程」として技術が存在している。山田の見解では、印刷メディアの場合には、この技術過程は意味の変更をせまるほどの影響をもつことはない。これに対して、放送メディアの場合、「メディアそれ自身の媒介作用は、はるかに複雑」であり、「メディアそのものが表現と解釈にたいし、有意味の影響力をもつ」[同上、250-251 頁]。テレビ・メディアは、「テレビ・カメラの対象（オリジナル）と、カメラによってオリジナルに加工をくわえ、…省略…それを変質させ、人間的営為による価値を付与して、コピーを生み出す。」オリジナルとコピーの間には、「テレビ・カメラとその中継・放送・受像という幾段もの媒介作用が介在」しており、場合によっては、「オリジナルじしんもまた、変わってくる」のである [同上、251 頁]。

山田によれば、現代では、主観／客観という認識論の古典的構造は崩壊しており、これを技術的に体現するのがテレビである。マルクス主義における反映論は、認識論の古典的構造に対応したものであり、山田自身が「メディア史の論理」で展開するのはテレビ時代に対応する「媒介作用」の理論である。だが、この視点は技術決定論的なメディア論を山田が取り入れた結果ではない。意外なことに、これはマルクスに関係がある。「マルクスは、認識対象と認識主観のあいだに、生産関係を中軸にした社会機構が介入することを理論体系にひきいれた。そこに、この理論のもった変革的な力の源泉があっ



た。いかなることに、このマルクスの認識構造は、そのご一九三〇年代のソビエトでミーチンを中心に物質—意識の二極構造にひきもどされた」[同上、208 頁]。反映論に回収し得ない視点がマルクスにあり、山田の「メディア史の論理」は主観／客観図式に介入する媒介作用をコミュニケーション・メディアの次元で考察する。むろん中井においてもまた、主観／客観という認識論の古典的構造は乗り越えられており、自然系列と人間的系列を結合する「媒介としての技術」への関心が見いだせる [中井, 1981 a, 85 頁]。

### (3) 集団的コミュニケーションにおける否定性

既に見たように、鶴見俊輔は集団的コミュニケーションと弁証法の関連づけという視点からレーニンおよび中井の「委員会の論理」を位置づけ、サークルの論理の批判的検討を行っていた。これらは「委員会の論理」におけるコミュニケーション論的な問題の系列と呼びうる。この問題系について批判的検討を行ったのは 70 年代に竹内成明が『展望』で発表した諸論考であり、それらは 1980 年に『闊達な愚者—相互性のなかの主体—』として出版されている。ここで竹内は、「委員会の論理」における集団的主体性（「委員会」）に潜在的に含まれた「啓蒙主義批判」の側面を顕在化させている。

「委員会の論理」では、「提案」「決議」「委任」「実行」という循環的な過程が含まれており、論理や理性は、「実行をふくむ生きたシステム」として考えられている。しかし、それは合理主義的な情報理論のフィードバックとは異なる。なぜなら「委員会の論理」は批判によって別のものに換わる可能性をもつ、換言すれば「自己否定の契機」をもつものとして提出されているからである [竹内, 1980, 146 頁]。「この図式がみずからほかのものに換わることにまた実践の論理の重大な意味がある」[中井, 1981 a, 107 頁]。鶴見俊輔においては、集団的コミュニケーションと弁証法を関連づけるものとして「委員会の論理」が理解されていた。竹内においてもまた、「相互行為」（集団的コミュニケーション）と弁証法が関連づけられているものの、そこには自己否定の契機に対する注目があリ、ここから合理主義的システムをこえるもの

として委員会がとらえられている。

#### (4) メディア、コミュニケーション、実践

鶴見俊輔の論文「マルクス主義のコミュニケーション論」に端を発する中井研究について述べてきた。以下で、二つの問題系について整理したい。第一に、鶴見は、上部構造と下部構造の相互規定を前提としてコミュニケーションと一般史を把握した。特定の条件下における上部構造の働きを認めるこの立場によってこそコミュニケーションは重要な対象となり、中井の「委員会の論理」は、論理と歴史の決定論的關係を回避するものとして評価された。山田宗睦において、この問題系はテレビを射程に含む「メディア史の論理」に展開される。その試みは、反映論ではなく「媒介作用」の論理に依拠し、コミュニケーション・メディアによる認識の規定性を歴史的に定式化するものであった。第二に、鶴見は、集団的コミュニケーションと弁証法の関連づけを「委員会の論理」に見出し、サークルを批判的に検討した。委員会を介した集団的コミュニケーションと弁証法の関連づけという問題に対し、竹内成明は否定性の視点を付加する。これにより、合理主義的に読まれてきた「委員会の論理」に潜在する合理主義批判の萌芽が指摘されたのである。

マルクス主義のコミュニケーション論における中井研究は、一方で、認識の規定性を歴史的に探求する点でメディア社会学の側面を内に含み、他方、弁証法論理学による集団的コミュニケーション論を含んでいる。マルクス主義のコミュニケーション論における中井研究は、メディア社会学の視点と対立するのではなく、それを含む。そして、中井自身の著作にもメディア論とコミュニケーション論という二重の視点が見いだせる。集団的コミュニケーションとしての委員会の中には、認識を規定するメディア論的視点が組み込まれているのである。中井における委員会は主観を持つ個人が集団となって相互に意志伝達をするものではない。彼にとって、「すでに個人としての主観は崩壊」しており、全体は「意識のない関係構造」にとけ込んでいるのである〔中井、1981 c, 132 頁〕。委員会とは個人の主観なき機械時代における集

团的認識の形態であり、レンズ、フィルム、電話、真空管、印刷、図書館は  
いわば委員会の器官となりうる。

中井研究、および中井自身の著作においてメディア論とコミュニケーション  
論という二重の視点が見いだせる。にもかかわらず、中井研究においてメ  
ディア論が低く評価されるとすれば、それはなぜであろうか。一つの可能性  
は、構造としてのメディアによる認識の規定／コミュニケーション的行為に  
おける創造的実践という対立図式である。これを前提とする限り、メディア  
論的中井研究は構造的な認識の規定を対象として実践の問題を軽視するとい  
う空虚な中井論にならざるをえない。必要なのは、構造としてのメディア／  
行為としてのコミュニケーションという区別の交叉に注目することである。  
一方で、集団的なコミュニケーション的行為がなされるのは、構造に規定さ  
れた歴史的状況においてであり、他方、構造としてのメディアが主体の認識  
を規定するには、メディア使用やコミュニケーション行為が前提となる。だ  
とすれば、コミュニケーション的行為における構造のみならず、メディア使  
用という行為を考慮しなくてはならない。こうして、メディア論的中井研究  
でも、メディアを介した実践を構想する余地がうまれる。それでは、実践の  
意義はいかにして確保されるのだろうか。

中井の「委員会の論理」では、三つの文化段階における論理が、各時代の  
社会制度と並行して定式化されている。古代文化の「いわれる論理」は「弁  
証の論理」であり、氏族制度と封建制度がその背景にある。中世文化の「書  
かれる論理」は「瞑想の論理」であり、それは奴隷制度と封建制度を背景と  
する。近代文化においては、「印刷される論理」があり、ここでは経験、行動、  
機能の論理が生じている。この背景には封建制度、商業制度、産業制度、金  
融制度が想定される。最後の近代文化には、従来のあらゆる論理を保持する  
「委員会の論理」があらわれる [中井, 1981 a, 68 頁]。

注意すべきなのは、各文化段階で新たな論理法則がつかまれていくにせよ、  
「古い論理が捨てられるということはない」点である [鶴見, 1962, 286 頁]。  
「各段階のすべての合理性は、…省略…みずからの中に前に獲たすべての合理

性をほかのものに転換することで、しかもみずからのものとして保持してきたのである。][中井, 1981 a, 68 頁]。ある歴史段階には支配的なコミュニケーションの形があり、これに対応する支配的な認識構造がある。しかし、中井の「委員会の論理」が想定するのは全体を包摂する一枚岩の秩序ではない。なぜなら、あらゆる論理の再編である「委員会の論理」の前提は、以前の段階の残余である論理が次の段階に保持され再編されることであり、このためには、支配的構造が完全なものではなく、裂目の中に非支配的な論理を孕むことが必要だからである。また、各文化段階の「崩壊と再編成」における論理を指して中井が述べた「裂けめにおける生けるラチオ」は、転換期にあらわれた新たな論理の重要性を示唆するものと思われる。中井において社会は完全なる全体ではなく、否定性としての裂目を孕んだものである。社会的全体性への批判に基づくヘゲモニ的社會像の視点から中井の理論を検討する必要があるだろう。

支配的秩序に裂目がはさまれていることは、実践の意義を確保する点で重要である。なぜなら、所与の歴史的段階で社会やメディアが認識を拘束する場合、支配的秩序に裂目が孕まれていなければ、集団的なコミュニケーション的行為は支配的秩序の論理から抜け出すことはなく、支配的構造を反復するものとなる。ここでは実践の意義は確保しえない。支配的秩序からまぬがれるための非支配的な諸論理が社会の裂目に保持されているからこそ、集団的なコミュニケーション行為は実践として評価され、自ら他のものに転化するという委員会の否定性が成立するのである。

メディア論とマルクス主義は、一般に、技術決定論と経済決定論として対立的に把握されるのが常であった。興味深いことに、中井の理論にはメディア論とマルクス主義が共存している。そこには、技術決定論とも社会決定論とも異なる、メディア社会的視点がある。認識の規定性を歴史的に探求するメディア社会的側面を中井に見出したのは、逆説的にも、マルクス主義のコミュニケーション論である。中井自身においてもまた、メディアによる認識の規定とコミュニケーション的行為という二つの契機が委員会において

絡み合っていた。本稿では、構造としてのメディア／実践としてのコミュニケーション的行為という対立の交叉を注視することで、メディアを介した行為を導き出した。さらに支配的構造における裂目を前提とすることで、実践の意義を確保したメディア社会学的中井研究が可能になるのではなかろうか。

## 注

- (1) 中井において、大衆化と専門化は対立しない。むしろ専門化の徹底は大衆化へと反転する。「文化が極度に専門化することによって、おのおのおたがいに専門外になり、相互に俗衆化すること、すなわち精神的専門化がそのまま精神的な大衆化をもたらすのである」[中井, 1981 b, 52 頁]。
- (2) [久野, 1986, 199 頁]。
- (3) 中井は、ハイデッガーを論じる際、内在と超越の対立とは異なる「新しき超越」に着目している。それは、「内在に対立する超越ではなくして、内在の組織の一構成要素としての超越である」[中井, 1981 b, 21 頁]。内在的と超越的の二分法を超えた地点で中井は、内在的超越を試みている。
- (4) 「Subjektの問題」(1935) [中井, 1981 a, 44 頁] を参照。
- (5) ポピュラー・カルチャー研究の観点から中井正一を読む試みとして、拙稿 [門部, 1998] がある。
- (6) [鶴見俊輔, 1959, 287 頁]。
- (7) [鶴見俊輔, 1959, 288 頁]。
- (8) メディア論的観点から中井に言及した文献としては [桂, 1996] がある。また、山田宗睦の『コミュニケーションの文明』は、メディアを書名としていないが、メディア論的視点が多々含まれている [山田, 1972]。また、佐藤晋一の論文「中井正一のコミュニケーション論—『集団的主体性』形成の論理—」においては、表題にもかかわらず、オングやマルクルーハンなどメディア論者の名が注の中で頻繁に言及されている。

- (9) 鶴見が「マルクス主義のコミュニケーション論」を書いたのは50年代終わりであった。R.ウィリアムズが『コミュニケーション』を出版したのは1962年である。周知のように、40年代から60年代初頭において、アメリカ行動科学によるアプローチが主流派を形成していたが、その衰退と並行して批判的パラダイムがあらわれる [Hall, 1982]。イデオロギー的パースペクティブを特徴とする批判的パラダイムに時代的に先行したのは、フランクフルト学派である。日本の場合、鶴見が「マルクス主義のコミュニケーション論」の先駆とみなしたのは中井正一であった。
- (10) これについては [岡田, 1987, 13 頁], [佐藤, 1990, 93 頁] を参照。
- (11) 対立物の相互依存、及び相互転化について論じた毛沢東の『矛盾論』(1937)の読解から、鶴見は、コミュニケーション研究におけるディスコミュニケーションの重要性を指摘する。「コミュニケーションは一時のもの、一定の条件下のものであり、もっと長期的なディスコミュニケーションの歴史の中においてのみコミュニケーションを十分に考察することが可能になる」 [鶴見, 1957, 432 頁]。
- (12) マルクス、エンゲルスでは「生産力および交通」という並列的表記がある。鶴見の理解によればコミュニケーションと同義である「交通」は「すでに生産そのものの中に、不可欠な要素としてふくまれている」 [鶴見, 1957, 421-422 頁]。ここには、生産と交通 (コミュニケーション)、物質と観念の分割はない。「生産」は「交通」と対立するのではなく、「不可欠な要素」として「交通」を自らの内に含んでいる。
- (13) マルクス・エンゲルスにおいて観念と物質の関係は以下のように説明される。「この歴史観は、どの時期においても観念論的歴史観のように一つのカテゴリーをもとめる必要はなく、どこまでも現実的な歴史地盤にふみとどまり、実践を観念から説明するのではなく、観念構成物を物質的实践から説明する」 (マルクス・エンゲルス, 古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫, 1989, 52 頁)。なお、『ドイツ・イデオロギー』には、中井とともに『世界文化』に参加した真下信一の訳がある (大月

書店)。

- (14) 驚くべきことに、当時政治的評価の低下したスターリンの仕事を鶴見はあえて取り上げている。スターリンは「言語の歴史には経済史における発展段階に直接対応する変化のないことを主張して、言語に相対的自律性をみとめたことによって、かけがいのない補正機能をはたしている」[鶴見, 1975, 430 頁]。スターリンの評価を扱うのは本稿の課題ではない。重要なのは、鶴見俊輔が言語の「相対的自律性」を重視したことである。
- (15) この意味では、観念と物質の交叉を踏まえながら、物質的なものによる象徴的なものの条件づけを探求するレジス・ドゥブレは刺激的である [Debray, 1991]。
- (16) クリステヴァによると、毛沢東のいう主体性は、高度な矛盾を體現していながらも、「原子のような主体性」にとどまっている。彼の言う「実践」は、「実践的概念」の形式のもとで認識する主体性によって支えられているのである。しかし、クリステヴァによると、この「実践的概念」の形成過程にはそれに先立つ契機が含まれている。実践における現実の直接経験は、「主体の炸裂が起こりうる縁」を、「主体の刷新の条件」をも含んでもいる。クリステヴァによると、毛沢東は、「原子のような主体」と「主体の刷新の条件」に対応する二つの契機を区別していたが、それを「観念論的弁証法、ないし機械論的唯物論、およびマルクス主義の教条化は圧殺しようとしてきた」[Kristeva, 1974=1991: 224-225 頁]。なお、クリステヴァが検討しているのは毛沢東の『実践論』である。『実践論』と「委員会の論理」の関係については注(18)を参照されたい。
- (17) 経済決定論への批判は今日では常識的なものである。マルクス主義的発想を現代に生かす示唆を与えるものとしては、アルチュセールの経済による最終審級における決定の契機を批判し、重層的決定を高く評価したラクラウの論文がある [Laclau, 1988]。
- (18) この1年後、上山春平は中井の「委員会の論理」と毛沢東の『実践論』との一致を指摘している[上山, 1960]。また、久野収によれば、中井が



久野を促して、レーニンの『一步前進，二歩後退』やルカーチの『歴史と階級意識』などを読み合わせる仕事を続けていたという [久野，1962，296 頁]。

- (19) 1963 年、『思想の科学』における座談会で、鶴見俊輔は、論文「委員会の論理」を読むことが出来たのは 7，8 年前であることを明らかにしている。「委員会の論理」は「僕らにとっても伝説的で、読んだのは非常に近頃のことですよ。今から，七，八年前です。とにかく手にはいらない書物ですからね。」 [鶴見，1963，80 頁]。
- (20) 鶴見の「マルクス主義のコミュニケーション論」が反映論に批判的であるのに対し、稲葉三千男の「マルクス主義のマス・コミュニケーション論」は反映論を基本軸としたものであった [稲葉，1987: 102 頁]。
- (21) メディア思想史の先駆的著作はハヴロックの『プラトン序説』である [Havelock，1963]。彼はそこで声から文字へのメディアの移行と対応する文化変容を、ホメロスのなものとプラトンのなものととして図式化し、文字を批判するプラトン哲学そのものが文字文化の産物であることを指摘する。ただし、口承の文化と文字の文化、あるいはホメロスのなものとプラトンのなものという二分法については批判的に検討する必要がある。
- (22) 1972 年に山田宗睦『コミュニケーションの文明』が出版される以前、マクルーハンの著作が多数翻訳されている。1967 年には『人間拡張の原理 メディアの理解』と『マクルーハン理論』が、1968 年には『機械の花嫁』と『グーテンベルクの銀河系』、及び『メディアはマッサージである』の訳書が出版されている。山田の『コミュニケーションの文明』には「メディア＝メッセージ型」などの言葉があり [山田，1972，159 頁]、マクルーハンのメディア論の影響が見てとれる。
- (23) これは『ドイツ・イデオロギー』における生産様式概念の影響を受けた著作である。ここでは、ポスト構造主義と批判理論を交叉させながら電子メディアによるコミュニケーションが考察される。ポスターは、生

産様式のかわりにシンボル交換のヴァリエーションによって歴史を区分し、経済活動ではなく情報に重要性を与える [Poster, 1990=1991, 10~11 頁]。しかし、これは、生産様式論の単なる裏返しではない。彼は、ポスト構造主義に眼を向けることによって「情報様式の理論を、生産様式の理論を反映しつつそれに取って代わるものとして展開することを予防している」[同上, 30 頁]。

- (24) 直接性に媒介が含まれている視点はヘーゲルに遡る。現代では、媒介の論理はレジス・ドゥブルの著作に見られる。彼の提唱する「メディアオロジー」は、イデオロギー／科学の「可逆性」を前提としており、イデオロギーに対応する信 (croyances) の批判を行う。通常イデオロギー論と異なり、彼は信 (イデオロギー) の支え (support), いわばコミュニケーションのヴィークルに注目する。ただし、メディアオロジーにおいて重視されるのは、メディアというより媒介作用 (médiations) である。媒介作用を通じて、観念は物質的な力をもつ。メディアオロジーにおいて *médio* が意味するのは、技術的かつ社会的に規定された、伝達と象徴的循環における総体的手段の近似値であり、書物、電子、大量拡散の手段と見なされているもの (印刷、ラジオ、テレビ、映画、広告)、これら現代のメディア圏に先行し、またそれらを乗り越えるものの総体である。メディアオロジーの領域には、さらに教育システム、カフェ、教会の説教壇、図書室、インク壺、タイプライター、集積回路、居酒屋等々が含まれる [Debray, 1991, pp 13-62.]。なお、中井とドゥブルの理論は、媒介論理の形式化と歴史的区分を行った点で共通するという解釈がある [上野, 1995]。ただし、仮に両者の議論に同一性が見いだせるとしても、同一性における差異性をより詳細に検討することが課題となるのではなかろうか。

## 【一次文献リスト】

- 中井正一『中井正一全集 1 哲学と美学の接点』久野収編，美術出版社，1981  
a。
- 『中井正一全集 2 転換期の美学的課題』久野収編，美術出版社，1981  
b。
- 『中井正一全集 3 現代芸術の空間』久野収編，美術出版社，1981 c。
- 『中井正一全集 4 文化と集団の論理』久野収編，美術出版社，1981  
d。
- 『美術入門』朝日新聞社，1977。
- 『美と集団の論理』久野収編，中央公論社，1962。
- 『増補 美学的空間』（鈴木正編），新泉社，1982。
- 『世界文化 復刻(1)～(3)』小学館，1975。

## 【二次文献リスト】

- 井上俊「アテナイの民主制とプラトンのコミュニケーション論」江藤・鶴見・  
山本編『講座コミュニケーション1・コミュニケーション思想史』研究  
社，1973（『悪夢の選択—文明の社会学』筑摩書房，1992 所収）。
- 稲葉三千男『マスコミの総合理論』創風社，1987。
- Willams, R., *Communications*, Chatto & Windus, [1962]1966（立原宏要訳  
『コミュニケーション』合同出版，1969）。
- , *Problems in Materialism and Culture: Selected Essays*, VERSO,  
1980.
- 上野俊哉「レジス・ドブレの『メディアオロジック宣言』を読む」*Inter Commu-  
nication* No.12.1995.
- 上山春平「中井正一の『委員会の論理』」『思想の科学』第 23 号，1960。
- 岡田直之「マス・コミュニケーション研究の方法論的視座 解説」，竹内郁郎・  
岡田直之・児島和人編著『日本の社会学 20 マス・コミュニケーション』  
東京大学出版会，1987。

小沢芳治, 「表現と大衆」, 江藤・鶴見・山本編『講座・コミュニケーション

6 コミュニケーションの典型』, 研究社, 1973。

桂英史「オートマトン・コンプレックス—端末市民の起源と進化—」責任編

集桂英史『20世紀のメディア』第3巻, ジャストシステム, 1996。

久野収「編者のことば」, 久野収編『美と集団の論理』中央公論社, 1962。

——『三十年代の思想家たち』岩波書店, 1976。

——『ファシズムの中の1930年代』リプロポート, 1986。

——「京都学派と三十年代の思想」『批評空間』, 第II期第4号, 1995。

Kristeva, K., *La Révolution du langage poétique*, 1974. (クリステヴァ,  
原田訳, 『詩的言語の革命』劉草書房, 1991)。

後藤和彦「コミュニケーション史の研究史」, 『講座コミュニケーション2 コ  
ミュニケーション史』江藤・鶴見・山本編, 研究社, 1973。

左藤毅, 「同化と異化」, 江藤・鶴見・山本編『講座・コミュニケーション6  
コミュニケーションの典型』, 研究社, 1973。

佐藤晋一『中井正一・「教育」の論理学』近代文芸社, 1996。

『思想』第12号, 特集「1930年代の日本思想」, 岩波書店, 1997。

杉山光信「中井正一試論—その言語・映画の理論と弁証法の問題について—」,  
『東京大学新聞研究所紀要』第23号, 1975。

竹内成明『闊達な愚者』れんが書房新社, 1980。

鶴見俊輔(司会), 栗田勇, 佐々木基一, 多田道太郎, 永井潔, 野間宏(出席  
者), 座談会「中井正一とわれわれの時代—民主主義の未来形—」『思想  
の科学』第14巻5号, 思想の科学社, 1963。

鶴見俊輔「マルクス主義のコミュニケーション論」, 『思想』1957. 7月号(『鶴  
見俊輔著作集第1巻』, 筑摩書房, 1975)。

——「思想の発酵母胎」, 『思想の科学』, 中央公論社, 1959. 7。

——「戦後からの評価」, 『美と集団の論理』久野収編, 中央公論社, 1962。

——「コミュニケーション史へのおぼえがき」, 江藤・鶴見・山本編『講座  
コミュニケーション2 コミュニケーション』, 研究社, 1973 (『鶴見俊

- 輔著作集第1巻』, 筑摩書房, 1975)。
- 「解説」, 『中井正一全集4』 久野収編, 美術出版社, 1981。
- Debray, R., *Cours de médiologie générale*, Gallimard, 1991.
- 中井浩, 『コミュニケーションの構造』 ダイアモンド社, 1974。
- 中村雄二郎『共通感覚論—知の組みかえのために—』 岩波書店, 1979。
- Hall, S., 1982, 'The rediscovery of "ideology": return of the repressed in media studies', in M. Gurevitch, T. Bennet, J. Curran, S. Wool-lacott, (eds), *Culture, Society and the Media*. London: Methuen, pp. 56-90.
- Havelock, E.A., *Preface To Plato*, The Belknap Press of Harvard University Press: Cambridge, 1963.
- 馬場修一「大衆化の論理と集団の主体性—戸坂潤・中井正一・三木清の場合—」, 江藤・鶴見・山本編『講座コミュニケーション6 コミュニケーションの典型』, 研究社, 1973。
- 針生一郎「中井正一のコミュニケーション論」, 江藤・鶴見・山本編『講座コミュニケーション1 コミュニケーション思想史』, 研究社, 1973。
- Poster, M., *Critical Theory and Poststructuralism: In Search of a Context*, Cornell University Press, 1989.
- , *The Mode of Information: Poststructuralism and Social Context*, Polity Press, 1990. (室井尚・吉岡洋訳『情報様式論』 岩波書店, 1992)。
- , *The Second Media Age*, Polity Press, 1995.
- 門部昌志, 「中井正一の思想と映画—ポピュラー・カルチャーの社会学—」, 『年報人間科学』 第19号, 1998。
- 山田宗睦『コミュニケーションの文明』 田畑書房, 1972。
- Laclau, E., 1988, "Metaphor and Social Antagonisms" in, Nelson and Grossberg (ed), *Marxism and the Interpretation of Culture*, University of Illinois Press.